
僕は弱いもの

OG3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は弱いもの

【Nコード】

N1479Y

【作者名】

OG3

【あらすじ】

どこにでもいそいでいない転生者がリリカルなのは世界で大暴れ！？

1 (前書き)

はじめまして、この度初めて小説を書かせていただきます。
至らないところあるとおもいますが、皆さんに楽しんでいただける
よう精一杯がんばりますのでお願いします。

突然だけど僕はどうやら死んでしまったらしい、なぜらしいかって？それは、

「本っ当にすみませんでした!!」

自称神様がさつきから僕の前で土下座をしているのだ。

神様が言うには死因は僕の寿命の設定ミスらしい・・・なんだそりや。

しかもなんだかんだあって転生するらしい、本来死なない者が死ぬのはすごくヤバイことなんだとさ、しかも転生先がリリカルなのは世界らしい神様はどうやら一度死んだにもかかわらずまた僕を死なせる気満々らしい。だって僕全然運動とか出来ないし、魔法使いつて数学出来なきゃダメって漫画か何かでみたけど数学とか理解できる気しないよ例え小学校から勉強したとしても、なら関わらなきゃいいと思うだろ？誰だってそう考える僕だってそう思う。でも無理そうだって・・・

「やっぱり魔導師ランクはSSSで・・・デバイスは・・・」

とかなんか物騒なステータスを僕につける気満々だし、ヤベーどうしよう何か対抗策ないかな・・・そうだ!

「神様!」

「やっぱり使い魔はfateのサーバントの・・・あれ、どうかしましたか?」

どうかじゃねーよ、ステータス変更だけじゃあ飽き足らず使い魔までつける気だったのかこの神様、しかもサーヴァントって絶対僕の手には負えないからな。ここは無難に魔導師にばれにくくかつ生活に利用できそうな物にしなきゃ。僕の平凡を守るために！

「スタンドがほしいなーそれと仮面ライダーにもなりたい」

「スタンドと仮面ライダーですか？」

「スタンドはホワイトスネイクで仮面ライダーはアクセルちょうどいい。後は適当でいいや」

仮面ライダーアクセルとは仮面ライダーWに登場するサブライダーだ。何故アクセルを選んだかというと、飛べるからだ。簡単な理由だろ？

スタンドはホワイトスネイク、対象者の記憶をディスクに換えて記憶を操作できるスタンドだ。もし万が一アクセルの正体がばれてもこいつで記憶を消せば無問題だ。他にも本編では相手のスタンドすら奪えるのだがこの能力はリリカルなのはでは関係ないからいいだろう。

「遠慮しなくてもゴールド・エクスペリエンス・レクイエムとかBLACK RXとかでもいいんですよ？」

それだとチートすぎるだろ

結果から言つと僕の提案は全て承諾された。・・・そう全て

気がつくとも知らないベッドに寝ていた。どうやら転生したらしい早速新たな僕の顔を見に洗面所に行こうと部屋のドアを開ける。どうやら僕の家は二階建ての一軒家のようなみに僕が寝ていた部屋は二階にあった。階段を降りて洗面所のドアを開けて鏡の前に立つ、ドキドキするなあ。

鏡の向こうには10才かそこらの男の子がいた。顔は適度に整っており、黒髪黒目、いたって普通の日本男児だ。

「よかったー」

心の底からそう思った。オッドアイとか銀髪じゃなくてよかった。まず容姿はOKだこれなら普通のどこにでもいる子供だ。

ひとまず安心して洗面所をでてリビングへ向かう。さて僕のあたらしい両親はどんな人かなーとか思ってからリビングへのドアを開いた。
・・感想を一言で言うなら『普通』だ。

さて、まずい事になった。どうやら僕達家族は最近ここに引っ越してきたんだって、ここってどこかって？もちろん海鳴市だよ。そして僕は転校生だ。通学先は私立聖祥大附属小学校、学年は何年生かって？三年生だよ。どうしてわかったかって？もちろん僕のスタンダード『ホワイトスネイク』の能力で両親の記憶を読み取ったのさ！まさかいきなり使うことになるうとはびっくりだ。とりあえず転校初日に遅刻や欠席はまずいので学校にいかなきゃ。

さて僕は今バス停にいます。小学生なのにバス通学とは、私立って

すごいね。しばらくするとバスがやって来た。この中にはなのは達
はいるのかな？まあいても関わらないけどね。

現在午前八時四十分・・・うん、遅刻確定。どうやら僕が待ってい
たバス停は普通のバス停であって通学バスのバス停ではなかったの
だ。運転手のおっちゃん終点で教えるんじゃないやなくて乗る前に教えて
くれよ。おっちゃんには学校に連絡を入れてもらい学校までの行き
方を教えてもらいました（スタンド使って連絡するという記憶をい
れ学校までの行き方を見ました）でも学校まで軽く1キロ近く離れ
てるんだよね・・・

「変っ身!!!」

なんとか一時間目途中で間に合いました。

「それでは自己紹介のほうお願いね」

授業を中断して僕の自己紹介になった。チョークを持って自分の名
前を黒板に書き込む。

『相生 優』(あいおい ゆう)

それが僕の新しい名前だ。

転校初日の授業が終わった。久しぶりに受けた授業は結構面白かったし、クラスメート達は気さくな奴らばかりだこれからも仲良くしていけそうでありよりだ。早速隣の席のバウアー君に帰ろうとしたところ声をかけられたどうやらこれから校庭でサッカーをするらしい、帰宅部のエースたる僕はサッカーよりも野球の方が好きと丁重にお断りして帰路に着いた。もちろん、なのは率いる原作キャラには関わっていない。

帰り道最初のイベントはなんだったかなーとか考えながら、横断歩道の白いところだけ足をつけて渡っていたら突然頭の中に声が響いてきた。助けてくださいだって、これつてもしかして原作イベント？なのはあんまり覚えてないからわかんないや二次創作ならこういう時に主人公をサポートするデバイスなり従者なりがいるんだろうけど、僕にはいないからこういう時困るんだよね。そんなことを考えながら横断歩道を渡り終え、小石を蹴りながら歩きだした。

家に帰り堅つ苦しい制服から楽な私服に着替え、母さんに小遣いをせびり（一ヶ月千円だつて）なにか面白いものを探しに出かけた。なのはといえは何か有名な喫茶店？をやっているところがおいしいって前読んだ二次創作でやってたけど、普通は行けないよね、小学生が一人で喫茶店に行くなんて無理だよな？僕には無理だ。ここは無難に駄菓子屋にでも行こう。駄菓子屋って子供のときにしか行けないイメージがあるから今のうちに行かないとね。駄菓子の場所は帰宅途中に見済みだ。待つてるヨツチャンイカ！

駄菓子屋でヨツチャンイカとチロルチョコを買い（お会計30円残

金970円)店先の前でくっちやくっちやイカを噛んでいるとまともや声が響いてきた。

「またあいつか・・・」

何度も何度もよく飽きもせずによくやるなーと思い僕は声の主の事に興味を持ち声のする方向へイカを噛みながら向かった。それにしてもつまみなさすがヨツチャンイカ!

目の前にいたのは、白銀の騎士王・・・ではなく王に仕えた騎士の一人漆黒の鎧に身を包んだ巨漢だった。圧倒的な迫力だった。

そしてぼくは・・・

「うわあああああああ!!」

僕は全力で叫びながら逃げ出した。

頭の中で今度は声じゃなくBGMが流れる……ドラクエの敵に遭遇した曲だあれほど絶望感に襲われるBGMは僕の知っている中では存在しない。テロップまで浮かんでくる……『キラーマジンガが現れた!』

背後から何か声が聞こえてくるがそんなの関係ない!全力で走った!走って走って走りきった!

『しかし回り込まれてしまった』

そんなテロップ浮かんできた。一体どうして、何故こいつがここにいる?僕はちゃんと神様に拒否(適当の意味を調べてみよう)したはずなのに……いやもしかしたら僕の勘違いかもしれないきっとそうだ。そうにちがいない。

結論から言うと僕の右手に令呪がついてました。

『バーサーカー（ランスロット）が仲間になった』

何でだろう全然うれしくない。

ここからが大変だった家に帰るまで人に見つからないように隠れて移動しなければならず、見つかった人には記憶を少々変えさせてもらった・・・途中で霊体化させればいいことに気がついた。

「どうしてこうなった・・・」

時間は過ぎ夜、

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

バーサーカーが突然咆え、外に飛び出し駆け出していった。

「えっちょまあ」

驚きすぎてマジでこんな事言ってしまった。

「追いかけたほうがいいよな・・・」

僕は嫌々ながらバーサーカーが走っていったであろう道を追いかけていった。

僕が目にしたのは折れた電柱でなんかよくわからん生き物？をブツ飛ばしたバーサーカーとそのちよつと離れたところでバリアジャケツトに身を包み恐怖で腰を抜かした魔法少女だった。

バーサーカーがゆっくりと振り向くと魔法少女こと高町なのは体が多きく震えた。

「バーサーカー帰るぞ」

そう言うとバーサーカーはその場から掻き消えると持っていた電柱がゴトンとアスファルトの上に響いた。僕はクレイジーダイヤモンドがあつたらいいのになぁーとか思いながら、自宅へと戻った。

あれっ！？もしかして原作介入しちゃった？

翌日今度は間違えずに通学用のバスに乗り込んだ、中には昨日知り合ったbauer君がいて、僕を隣の席に招いてくれた。ありがたい、みんながきゃっきゃ騒いでる中でぼっちになるなんてものすごい苦痛だからね。bauer君はイタリアのサッカーチームがどうのこうのいつているが僕にはそんな事本当にどうでもいいことだった。あまりにもイタリアを推すのでイタリアのハーフなのって聴いたらお父さんがイギリス人なんだって、へえー

ところ変わってお昼休み僕は給食のほうが好きなんだけどこの学校では弁当持参、どこで食べても自由なんだって、さてバウアー君あたりと食べようと思ったたら僕の席に誰かが近づいた。

「相生くん。よかつたら一緒に弁当食べない？」

高町なのはだ。どうやら僕を誘いに来たらしい。

「ごめんこれからバウアー君と食べるんだ」

ここは屋上、隣にいるのは高町なのはバウアー君はなのはのツレ二人と一緒にいるよ。野郎とメシ食うよりかわいい女の子を優先しやがったバウアー君。

「昨日いたの相生君だよな」

昨夜のことはばれているようです。まああたりまえか僕だってあんな強烈なやつを率いているやつのは印象深く思うよ。

「実はお願いがあつてね」

もしかしてこれ積んだ？そう思っていると彼女から言葉がだされた。

「昨日のあの怪物のこととか全部内緒にしてほしいの」

「いっよ」

よかったあああああああ！！
ばれてないばれてないよね！？

あっさり承諾したことに彼女は何の疑いもなく笑顔でありがとうと言っていた。僕はそこで興味をもった彼女がこれからどうするのかを、彼女のいう怪物とはあのバーサーカーであるあんな奴相手に一体何をするのかと聴いてみた。

「私は、みんなを守りたいこれは私にしか出来ない事だから」
だって・・・それを聞いて僕は思った。

そついえばまだ弁当食べてないや。

転生初日から原作が開始されたわけだが正直言っただけならそんなことよりもやらなければいけないことがある。それはバーサーカーのことだ。昨夜いきなりこいつは原作介入しやがった。なんとかしなければ僕の平凡な第二の人生がいともたやすく崩れてしまう。とりあえず何事も話すことから大事だ。

「バーサーカー」

「……」

「僕の指示無しに勝手な行動するなよ」

「……」

なんか通じてるのかどうかわからないな。まあいざとなれば令呪使えばいいのかな？お願いしますから、何も問題が起りませんように。

唐突だがあれから一週間経ちました。あれ以降バーサーカーは勝手に暴走することは無くなり僕は穏やかな日常を送っている。やっぱり平和っていいなと思う常日頃です。でもひとつ困る事があるんだ

よね。

「やってみようぜ！サッカー！」

隣の席のバウアー君だ。明るくて話しやすくておまけにイケメンきつと将来はリア充になるんだろう。

「僕下手だからいいよ」

「下手とか上手いとか関係ないからさ」

本当か？前世では運動神経悪くてサッカー部のやつらに無茶苦茶責められたし、体育のチーム分けでは絶対に最後のほうまで残ってたような奴だからな。思い出すだけで嫌になる何が「こいつ入れるならボールはこっちからな」だ。

今の僕は逆上がりだつて満足にできないんだぞ…それは前からか。

「なら今度試合見に来いよ。見るだけでも絶対に面白いからさ」

いつまでもごねているとバウアー君がそう誘ってきた。見るだけならいいかな

「わかった。見るだけな」

「よーしなら今度の休みに試合あるから絶対来いよな」

バウアー君とそう約束した。面倒だけどここで断つたら印象わるくなるからしかたない。

そして約束当日バウアー君はわざわざ僕の家まで迎えに来て一緒に試合をするグラウンドまで連れて行ってくれた。そのおかげで道に迷って行けなかったという題目でサボることができなかつたわけだが、バウアー君狙ってやってないよね？そして試合開始バウアー君はあまり前に出ていなかった。もしかして守備のポジションだったのだろうか？バウアー君は積極的に前に出るものだと思っていたから少し以外だった。

僕がボーっと試合を眺めていると相手チームに見知った顔がいるのに気がついた。高町なのはだ。せつせと魔法少女の仕事をしているものと思っていたので、少し驚いたがまあいいかあと考え直しました。試合に目を向けると丁度バウアー君が相手選手にボールを奪われ、そのままシュートを決められていた。悔しそうな顔しているなあ。

結果はバウアー君のチームは負けてしまった。なんと言えばいいのかバウアー君はちょっと泣いていた。いや半泣きだ。こういう時どんな言葉をかけようか「ドンマイ？」「がんばったね？」「おしかったね？」どれだろうか？僕が励ましの言葉を考えると、バウアー君は舞台ですべった笑えない芸人のようにスツとその場を後にしていた。相手チームはこれから祝勝パーティーでもするのかみんなそろってゴキゲンにグラウンドを出て行った。後に残ったのは敗者のオーラをまとった少年サッカー選手達だ。勝負の世界は厳しいね。

やることもなくなったしこれからどうしようかなと思っ
ていると急に霊体化しているバーサーカーがざわめいた。

「バーサーカー」

僕が声をかけるとバーサーカーは落ち着きを取り戻し静かになった。一体バーサーカーは何を感じたのだろうか？…まあ分かってます。どうせジュエルシードでしょ？なら早くここから離れないといけない、僕は早足でその場を遠ざかりどこか遠くで眺められる場所がないか探すことにした。

「すつげえ」

あれから少し経つとでかい樹が生えていた。見るからに危険ですよと分かるくらいやばそうだ。

そのまわりを小さな光がちよろちよろ飛んでいる。きっとあれが高町なのはなのだろう何をやっているのかよく見えないがまあがんばれと思っていると光が急に消えてしまった。

「どうしたんだろ？」

僕は魔法のことなどこつればうちもわからないので彼女が一体何をしているのかわからなかったが大丈夫だろうと勝手に思い込んでいた。だって主人公だもんあの娘きつとチャージでもしてでかいの撃

つ気なんだろう？

30秒たったまだかな？

1分たった樹がさらに大きくなってきている。

3分たった

「あれっ？もしかしてやられた？」

ちよっ！？これからどうするの？主人公が負けちゃったとか嘘だろ？これからリリカルなのはどうなるの？ああそうかここで仲間の魔法少女が出てくるんだ。それでなのは助けてくれるんだきつとそうだ！

10分たちました誰も来ない

えつまさか僕がいかなきゃいけないの？マジで？本当に？

僕は混乱しているだつて戦うとか僕には絶対できないことだし…バ―サーカーで倒せるかな？でも丸腰じゃきついよな？何か武器無いかな…！！

「バ―サーカーこれ使え！！そんであいつをたおせ」

僕がバ―サーカーに渡したものは…

『accel』

周囲を轟かすエンジンの鼓動、バーサーカーの体を赤い鎧が包み込む。

「行けっ仮面ライダーアクセル」

僕の指示でバーサーカーが仮面ライダーアクセルへと変身し巨大な敵に向かっていくもしかしたら僕はすごいことをしたのかもしれない。サーヴァントには宝具とよばれる武器なり道具なり特殊能力があり僕が使役しているバーサーカーにもいくつかの宝具があるそのひとつに『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』というものがあるこれはバーサーカーが持った物は何であれ使いこなすことができるという物だ。バーサーカーはその宝具をつかい仮面ライダーアクセルの力を全力でつかいこなすことができるのだろう。ちなみに仮面ライダーアクセルの能力はパンチ、キック共に威力10tを超え、ひと跳び47m、100mを3秒で駆けぬけるのだ。しかもこれで全力ではなくガイアメモリをマキシマムドライブさせることによってより強い必殺技をくりだすことができるのだ。

そんなこといつてるあいだにバーサーカーが敵をボッコボコにしてやがる…襲い来る太いツルをアクセルの持つエンジンブレードでばっさばっさと切り倒し、勢いよく蹴るだけで巨木の幹が折れそうになっている。そろそろいいよね。

「バーサーカー！メモリブレイクだ！」

『ENGINE』

エンジンブレードからガイアウィスパーが木霊する

『ENGINE MAXIMUM DRIVE』

『エーススラッシャー』

必殺技が炸裂し巨木が消え去り中から二人の少年少女が解放される。
仮面ライダーアクセルの必殺技は人を傷つけず元凶のみを破壊する
のだ

とりあえず一件落着バーサーカー戻っていいよ。

あれ何か忘れてるような……

今日は休み明けの登校日、月曜日とか学校の始まりってちょっと憂鬱気味になるのはどうしてだろうね？学校が嫌いって訳じゃないのね。いつものように通学バスに乗り込むとバウワー君が前回のことなど無かったかのように笑顔であいさつしてくれた。やっぱりこいついいやつだなと再確認して他愛も無い会話を興じた。

「高町さんが怪我をして入院しています」

朝のHR開口一番先生がそうおっしゃった。なのはの席を見ると当たり前だが彼女はいなかった。

「先生！なのはの容態はどうなんですか？」

金髪の女の子が席から立ち上がり先生に不安をあらわに質問する。それは僕も気になるなんせこの町に散らばったジュエルシードはまだ全て集めていないのだろうかここで彼女が怪我で脱落なんて事になれば正しくリリカルなのは終了のお知らせだろう。

「安心してください高町さんの怪我は比較的軽いもので1週間もすれば退院できるそうです」

なのはの怪我が軽いものだとは先生に聞かされ安心したのか金髪の子

は席に座りなおしていた。

1週間って結構長いよね？その間ジュエルシードが出たらどうするんだろう？仮面ライダーなら2号ライダーが登場していたが、新しい魔法少女が登場するのだろうか…って登場するんだよね！？確か3人になるんだっけ？早く来い魔法少女2号…名前なんだっけ？

それからなのはにみんなから寄せ書きやら折鶴を贈ることがHRで決定され、一時間目の授業を潰してみんなで作成することになった。僕はクラスの三分の一近くが書いていた『早く元気になってください』を無難に書いて提出した。こういう時クラスメートとの友情が試されるけどなのはクラスメートの三分の一にこれでいいやと思われるような娘なんだと思うと少し悲しくなった。

そして最後になのはにこれらを届ける役を決めるのだが2人が真っ先に立候補した後1人というところで立候補者がいなくなった。まあみんな小学生だし面倒なんだなと思っっていると結局じゃんけんで負けた奴が行かされるといふ罰ゲームを決めるような選出方法になってしまい二十数人分の一の確立で罰ゲーム者が決定されることになった。

まあそんな運の悪いことにもならず今日は無事に終わることができた。このまま何も起こらなければいいのになんて思っているとふと気になったことがある。ジュエルシードを封印せずにマキシマムドライブで破壊したのだ。その破壊したジュエルシードってどうなったんだろう？なのはあのザマでも回収だけはしたのかどうか少し確認してみよう。

「ジュエルシードを渡してください」

「はっ？」

昨日ジュエルシードを破壊した場所に行ってみると、金髪の女の子にそんなことを問い詰められていた。多分この子が2人目の魔法少女なのだろう。

「そんなの僕もってないよ」

「そんな見え透いた嘘が通じるとでもおもってんのかい？」

事実を述べた僕に犬耳のお姉さんがそう返してきた。

「どうして嘘だっけ言うんだ？」

「あなたがジュエルシードの反応のあった場所にいるからです」

「それに境界がはっけている場所に平然といられるってことはあなた魔導師か何かなんだろ！」

どうやらこの2人は勘違いをしているようだ。どうやら僕をジュエルシードを回収しに来た魔導師だと思っているらしいでしょう。考えていると犬耳のお姉さんが痺れをきらしたのか敵意丸出しで叫んだ。

「おとなしく出さないってんなら、痛い目っ！？」

「アルフ!？」

犬耳お姉さんのセリフが途中で途切れ思いっきり後方へとぶっ飛び、金髪女の子がお姉さんの名を叫ぶ。お姉さんアルフって名前なんですね。すぐさま金髪の女の子は怒りでこちらをにらみつけるが、それも一瞬の事すぐさま顔を驚愕に染めあげた。金髪の女の子が見ていたのは僕ではなく僕の後ろの漆黒の鎧を纏った騎士バーサーカーだった。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

バーサーカーは声にもならない雄たけびを上げ少女目掛けて突撃するがそれを少女は空を飛びなんとか回避し空中で杖を構え攻撃魔法を撃とうとしている。だが、それがまずかった。

「があああ!？」

少女が表情を苦痛にゆがませ思わず声を漏らしてしまう。バーサーカーは空を飛んではない。ではなぜ、彼女は攻撃が当たってしまったのか、それはある武器をバーサーカーが使ったからだその武器とは…

「いつ石!？」

そうそのへんに転がっているただの石ころだ。ただの石ころをぶん投げただけでは彼女達の防護服バリアジャケットの前ではなんの問題にもならなかったはずだ。だがこの石は違うバーサーカーの宝具『騎士は徒手にて死せず(ナイト・オブ・オーナー)』によって強化されればただの石ころひとつとってもそれは立派な武器いや、兵器と呼んでも過言ではない物へと変わるのだ。

バーサーカーがアルフに第一の投石を当て続けて少女に接近し第二の投石を当て終えるまで5秒もかかっていませんさしく瞬殺

「って殺してないよな」

慌てて少女達に駆け寄るがぐったりはしているものの致命傷ではなかったようだ。ひとまず安堵の吐息をもらしたが安心するのはまだ早いしかるべく処置をしなければ、彼女たちの傷は悪化するだろう。僕はひとまず119をしてその場を離れた。

それにしても、バーサーカー強すぎたる!

前回起こった一方的な蹂躪の後、家に戻ると僕宛てに一通の封筒が届けられていた。一体何が入っているのか気になった僕は自分の部屋で中をあけてみることに、中には「ちゃんと、原作介入しなさい」と書かれた手紙に、ディスクケースと小さな箱が入っていた。まずディスクケースから確認してみる。3枚のディスクが入っていた。『THE・WORLD』『KILLER QUEEN』『KING Crymson』の3枚だ…これつてもしかして…僕の中に期待と不安が混ざり合ったなんというか落ち着かない気分が駆け巡る。ジヨジヨファンならこの気持ちわかるよね？

まず試しにディスクを部屋にあるゲーム機に突っ込んでみる…何の反応も無し一応PCなども使って全て試してみるがこれまた結果は変わらない。やっぱりこれらはゲームソフトだとか音楽CDとかでは無いようだ。僕の中でひとつの答えが導き出された。

「スタンドディスクだよね！？これっ！？」

スタンドディスクとは僕のスタンド『ホワイトスネイク』によってスタンドをディスクへと変えた物の事。つまりこれらを使えば僕は新たなスタンドを手に入れることができるということだ。

「あれっ？入らないな」

意気揚々と新たな力を手に入れようとディスクを頭に入れようとし

てみたが入る気配が全くしない何故だろうと考えているとスタンド
使いの基本を僕は思い出した。『スタンドは一人一体』しか手に入
られないのだ。僕は既にホワイトスネイクを手に入れているので
他のスタンドを使うことは出来ないだろう。新たに手に入れたで
あろうスタンドはどれもこれも強力な能力を持つすさまじいスタン
ドなだけに落ち込んでいるとあることを思い出した。

ある有名な同人ゲームでは主人公がスタンドディスクを自由に付け
替えていた（その主人公はスタンドを最大4体使うことが出来た
のだが）事を思い出し、もしかしたら出来るかもしれないとやって
みると

「出来ちゃった…」

一通りスタンドディスクを装着し、問題が無いかどうか確認してみ
ることに。

その間新しいスタンドの能力を簡単に説明しておこう。

『THE・WORLD』（ザ・ワールド）

パワー、スピード共にスタンドの中ではトップクラスを持ち、人を

殴れば軽く100メートルはぶっ飛ばし、銃弾なんか簡単に掴み取ってしまう。

これだけでもすごいのに、なんと時を止めることができってしまうのだ。時が止まった世界では、時をとめる事ができる者以外そのことを認識できず、動くこともできない。

ちなみに、今の僕では、体感時間で5秒程度も止めていられる。

『KILLER QUEEN』（キラークイーン）

爆弾を作り出す。それがキラークイーン的能力だ。爆弾には大きく分けて三つある。

第一の爆弾

この爆弾は一度に一つだけ作ることができる。キラークイーンが触れたものを爆弾に変えてしまう。爆弾には任意で自由に爆発させる『起爆型』と触れた人や物のみを爆発させる『接触型』に作り分けることができる。キラークイーンの爆弾の爆発をまともに喰らってしまうと、文字通り跡形も無く消え去ってしまう。

第二の爆弾

キラークイーンの左手の甲には、体温を感知して自動追尾する第二の爆弾が仕込まれており、シアーハートアタックと呼ばれる。ドク口をあしらった丸い物体にキャタピラがついた形をしており、一見それ自体が別のスタンドのようだが、あくまでキラークイーンの技（武器）の一種である。キラークイーン（の左手）の一部であるため、当然シアーハートアタックに与えられたダメージや能力は本体の左手へ還る。

自動操縦で敵を追尾し、接触すると爆破する。この爆破はシアーハートアタック自体が爆発するわけではなく、爆炎を放つか、前述の第一の爆弾のように触れている物体を爆破するため、爆発してもシアーハートアタックはその場に残る。なお、シアーハートアタックを射出している間でも、キラークイーン本体および第一の爆弾は（左手以外なら）併用できる。

第三の爆弾

スタンド使いではない人間にキラークイーンを取り憑かせ、その人物から本体についての情報を得た者、および取り憑いた人間を攻撃しようとした者を爆殺し、かつ、数時間程度の時間の経過を無かったことにする（戻す）ことができる。能力発動中はキラークイーンは憑かせた人間に丸ごと入り込んでいるため、スタンドが一切出せなくなる。

この世の時間を消し去る能力キングクリムゾンと、頭部に付いたもう一つの顔で未来を100%の確率で予知する能力エピタフがある。時が消し飛ぶと、物事の「過程」は消し飛び「結果」だけが残る。

具体的には「食べようとしていたチョコを知らないうちに口に含んでいる」などである。これは「消し飛んだ時間」の中で行われた行動の結果であり、過程を認識出来ないという事である。その間本体は自由に行動出来るが何かに触れることは出来ず、また他の何かに触れられることも無い完全な「傍観者」となる。劇中で「空の雲は千切れ飛んだことに気付かず、消えた炎は消えた瞬間を炎自身さえ認識しない」という喩えで説明がされているように、消し去った時間内での事象は本体以外には生物だろうと無機物だろうと認識することは適わず、時間を体験していないため記憶も残らない。

消し去れる時間の範囲は最大で十数秒であり、MAX以下でなら指定出来る。エピタフにより予知できる未来も同じく十数秒先までである。

エピタフの予知で見られる映像は必ずしも未来に於いて「自分の目が見ている映像」ではなく、自分を中心にあらゆる角度から客観的に見る事もでき、自分の背後の空間から見た場合「自分」+「前方」を見渡すといった事も可能である。また、エピタフの予知で見た映像は普段自分の目で見るとよりも遥かに「解析度」が高く、普段は決して見えない様な物も予知すると見える事がある。

この能力の真価は「エピタフ」による100%の未来予知と併用する事により、自分に都合の悪い未来の運命を察知した上で、それを無かった事にできる事である。対峙する者が「いつ」「どこから」「どんな攻撃」を加えようと、奇襲や不意打ちやどんなに高度な罠を張ろうとも、「攻撃を受けたという未来」をエピタフで先読みし、キングクリムゾンで時間を消し去る事により「攻撃を受けている過程」を無かったことにして回避する事が出来るため、この能力の上

に行く事はまず不可能である。

「チートだこりゃ…」

作業が終わると無意識にそうつぶやいた。どうやら僕は二次創作にありがちな『最強系オリ主』になってしまったようだ。今までは、原作介入すれば死ぬのは間違いないと思っていたが、これならもしかして…と考えてしまう。

現在僕の戦力は、生身で魔導師を圧倒するバーサーカー、そのバーサーカーが変身する仮面ライダーアクセル（トライアル、ブースター込み）とこれらのスタンド達、大抵の事なら打破出来そうだが、それでも僕は不安だ。せめてスタンドを全て装着できればよかったのに…まだなんかあったよね？

残りの小さな箱のことを思い出し、いそいそと開けてみると中にはよく分からない白っぽいかたまりが入っていた。

「なんだこりゃ？」

それを手にとって見ると、一瞬眩暈がして、気がつくとも手のなかにあったものは消えていた。どこに行ったんだろつとあたりを見回すが部屋の中が暗い。

「えっ……」

さつきまであんなに明るかったのにいきなりということで驚きはしたものの、まあいいかと思いき直し部屋の電気をつけるとそこには前半身だけの馬に人が跨った姿の異形が部屋の中にいた。

『メイド・イン・ヘブン』

ホワイトスネークが最終進化して誕生したスタンドだ。

時を無限に加速させるスタンドであり、本体以外の全生物は時の加速についていけず、傍目から見ると高速移動しているように見える。また、時に影響を与える能力を得たためか、この能力の発現から「止まった時」を認識できるようになる。スタンド自体の破壊力はザ・ワールド等と比較するとそれ程高くないが、時の加速による凄まじいスピードが加わることにより恐るべき攻撃力を生む。

このスタンドの真の能力は、時間を無限大に加速し続けることで世界を一巡させることである。一巡した間に全ての人間や生物は未来

にいつ何が起こるかを体験しており、その運命を変えることは出来ない（多少の違いはあっても運命に変更は無い。例えば紙を踏んで転ぶと言う出来事を体験している人間が、紙を踏むまいと回避したとしても別の物に躓き転んでしまう。）が、本体のみは自身や他者の運命に干渉、変更することが出来る。多分少年漫画屈指のチート能力だろう。

さっきのはもしかしたらDIOの骨とかそんなものだったんだろう
そしてこいつはいきなり夕方前から夜へと時間を加速させてしまっ
たのだろう。

「……………使うか？」

既に原作主要キャラが病院送りにされ、一体これからどうなってしまうの？っていう状況だ。それに僕はこれから起こるであろうリリカルなのは出来事をほとんど覚えていない。ならいつそのこと世界を一巡させ、情報を把握し、はじめからやりなおしたほうがいいのではないのだろうか？

それにもしかしたら歴史上の有名人とかを生で見ることが出来るかもしれないし、そいつらの記憶とかを奪い取ることができればすごいことが出来るかもしれないね？（メイド・イン・ヘブンホワイトスネイクに戻すことは出来ました）

そうと決まれば早速実行だ！

「メイド・イン・スプリング……！」

世界は一巡した。

5 (後書き)

次回からなのは達はいきなりですが、出る予定はありません。オリジナルキャラを出すべきか、それとも別のアニメや漫画のキャラクターを出すべきか、迷っています。

もしこの小説を読んでいたでいてる方がいらっしやれば、感想に意見のほうを書いていただきたいのです。

よろしくおねがいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1479y/>

僕は弱いもの

2011年11月13日05時55分発行